

文献紹介

横山昭市著：『愛媛・新風土記』

愛媛県文化振興財団 2000年3月 新書判
410頁 952円（本体）

愛媛県文化振興財団がこのたび「えひめブックス20」として刊行した『愛媛・新風土記』は、横山昭市愛媛大学名誉教授が、これまで愛媛県内でのさまざまな調査・研究や『愛媛県史』の編纂、『愛媛県風土記』（旺文社）の監修などを通じ、多年にわたって蓄積してきた成果を生かして、一般読者にもよく分かるよう、愛媛県の姿をコンパクトにまとめたものである。

本書は次のように、3部、9章から成る。

第1部 愛媛の風・水・土

第1章 風土と風土論

第2章 風土のしくみ

第2部 歴史のなかの伊予

第1章 歴史のロマン—古代

第2章 中世の残影—古城と水軍

第3章 近世—分割統治された伊予

第3部 近現代—20世紀の愛媛

第1章 愛媛県の成り立ち

第2章 近代社会の背景

第3章 風土産業の近代化

第4章 文化の風土性

参考文献

第1部（88ページ、全体の21%）は地形や気候などの、愛媛県のいわば自然環境であって、その複雑な地形や海岸線（その長さは日本の都道府県のうち第5位）、中央構造線のこと、中小河川のこと、「やまじ風」「肱川あらし」といった局地風や朝風・夕風のことなど、興味深いトピックが多く、多くの地図・写真入りで説明されているが、こうした自然環境を全体としては「風土」としてとらえ、「風水地理説」について解説したのち、久万盆地・宇和盆地の風水について説明している。さらに「〇〇灘」「〇〇瀬戸」といった名称や水銀とかかわりのある「丹生」地名について触れる。

第2部（106ページ、全体の26%）は古代から近世まで歴史的にみた伊予であって、第1章の古

代では伊予という名の起源や「道前」「道後」のこと、太政官道、条里制のことなど、第2章の中世では各地に築かれた城郭や海人の活躍、とくに河野水軍・村上三島水軍のこと、それとかかわって大山祇神社のことなど、さらに第3章の近世では伊予が松山・今治・西条の三つの親藩のほか宇和島・吉田・大洲・新谷・小松の計八つの藩、さらに川之江その他多くの天領に分かれていた事情や頻発した飢饉・百姓一揆のこと、和紙などの特産（藩の専売）、多くの街道と港について具体的に説明する。

第3部（204ページ、全体の50%）は明治維新以降の愛媛県であって、県名「愛媛」の由来や県域の変化、県境の画定、市町村の離合、人口の変遷といった基本的事項に続いて、道路・鉄道・海運・空港など交通関係のこと、木蠟・紡績・タオルなどの特色ある産業の盛衰や、ミカン・真珠その他の水産養殖のことなどを詳しく述べ、さらに文化の風土性と題して県民性、伊予方言、食生活や祭りにまで筆を及ぼしている。

最後に9ページにわたって参考文献が列挙されている。

以上が本書の内容概観であるが、一見すると、多くのトピックを連ねつつ愛媛県の歴史を概説しただけの読み物に見えるかも知れない。しかし、決してそうではない。本書には次に挙げるような幾つかの特色がある。

第1は、過去のできごとをすでに過ぎ去ったこととして叙述するのではなしに、その現況がどうなのかを明らかにしようと努めていることである。例えば明治以後の新しい道路の建設や鉄道の敷設など、単に歴史的経緯だけでなく、その現状を押さえ、地域的な存在として扱っている。端的に言えば、本書は決して愛媛県の歴史についての本ではなく、歴史地理について語った本である。また自然環境に関わる事項も、抽象的な解説ではなく、天井川や段畑景観、屋根にコンクリートブロックを置いた農家など、我々が直接観察できるものを通じて説明しようと努めている。

第2は、地理学者の書くものの特徴であり強みであるが、多くの地図が掲げられていることであ

る。そしてそれぞれについて著者原図なのか、他の文献からの引用であるかが明示されており、そういう点でも学術書としての体裁が整っている。

第3は、写真がこれまた多数掲げられていることである。大部分は著者の撮影で、撮影年次が記してある。多くは近年の撮影であるが、1965年撮影の伊予鉄道や1966年撮影の国道56号、1967年撮影の伯方町木浦の港など、古い写真も興味深い。

第4は、著者が自身で作成した多くの表が掲げられていることである。人口の変遷や経済関係など、オーソドックスな内容の表のほかに、例えば国名を冠したJRの駅名は伊予が26駅で全国1位であることを示す表(112ページ)のように、多少好事家的な内容の表もある。

第5は、この好事家的という点になるが、愛媛県各地を知悉している著者ならではの、たいへん興味深いトピックが拾われていることである。例えば、明治の県境の画定に関連して、島の南半分が愛媛県上浦町、北半分が広島県瀬戸田町になった瓢箪島(ヒョッコリひょうたん島のモデルと言われる)のことや、高知県との県境を流れる篠川を挟んで両県側にあった小学校が、昭和の初めの

校舎改築に際して合併し、その結果現在「高知県宿毛市愛媛県南宇和郡一本松町組合立篠山小中学校」という全国一長い校名の学校が生まれていることなど、多くのトピックが紹介されている。他愛ないことかも知れないが、こうした話題は広く一般読者に地理の面白さをアピールするに違いない。

以上述べたように本書は、学術的にみても高い水準の地理書であると同時に、一般読者にもよく分かる形で地理学の成果とその楽しさを伝えようとした、ユニークな刊行物と言ってよい。ただ、それだけに借しいのは、判型が新書判であるために、図版の中には縮小され過ぎて見にくいものが少なくないことである。もしも縦横がせめてこの1.5倍あったら、と思う図が多い。また、同様にページ数を抑えるためであろうが、巻末の参考文献のリストが追い込みで印刷されているのは分かりにくい(改行にしてほしかった)。もし将来、写真もカラーに改めるなど、新しい装いで出す機会があれば、是非B5判程度の大判にしてほしいと思う。

(浮田典良)